

シンクレティズム

シンクレティズムとは、異なる宗教文化が接触して生まれる文化的状況のことである。異なる宗教観念や儀礼が混淆して新たに生まれた宗教の形態を指すこともあれば、一つの社会に土着の宗教と外来の宗教が併存する重層的な信仰体系を意味することもある。いずれにせよ、それは宗教的統合のことであり、西洋起源の“宗教”という概念に拘らなければ、異なる文化の融合を指して用いることもできる。「ハワイ文化のキリスト教化」や「キリスト教のハワイ化」として紹介した個々の事象は、シンクレティズムの問題として捉えられるだろう。

だが、Stewart and Shaw (1994) も指摘するように、シンクレティズムという概念は、歴史的に見て、「真正性に欠けた不純なもの」「乱雑に混ざり合ったもの」といった否定的な意味合いを持つことが多かった。純粋性と真正性を持つ伝統が異質の文化に浸食されて変容してしまうという枠組みの中で、宗教的統合は語られてきたのである。加えて、この純粋かつ真正な伝統は、キリスト教などの世界宗教であることがほとんどであった。

現地化されたキリスト教をシンクレティズムという言葉で形容する時、そこにはキリスト教徒の（そしてキリスト教文化圏の研究者の）視線が潜んでいたのであり、それは決してキリスト教を受け入れた現地の人々（ネイティブ）の側から発せられた言葉ではなかった。しかし、たとえ混淆的、重層的と指摘されようが、現地の人々の信仰は一つである。彼らのキリスト教が真正であるかどうかは、外来者の設定した“純粋性”によって断定されるのではなく、彼ら自身がその信仰を我がものとしているかどうかによって計られるべきものなのだ。シンクレティズムという言葉を用いるのであれば、以上の点を良く了解しておく必要がある。

ハワイ人のキリスト教信仰の過去と現在

異なる民族、異なる言語、異なる文化が接触し混淆していった19世紀のハワイは、過激にシンクレティックな文化的状況を呈していた。混淆宗教としてのシンクレティズムとしては、1860年代のカオナの反乱や90年代に興ったケキピの独立教会の事例があげられる。一方、重層信仰としてのシンクレティズムについては、19世紀末の宣教師系の新聞や伝道協会の年報などに、興味深い記事が散見される。例えば、マウイ島ハナ地区の教会の執事は、20ドル金貨にハカという名前を付け、過去40年以上にわたって崇拜の対象として保持していたが、ハワイ人巡回伝道師と執事の息子の説得により、その金貨は教会の財産として没収されたという。また、新任のハワイ人牧師は、前任者の家の中に伝統的な宗教儀礼に用いるアヴァの根やライパーホアの木片があるのを見つけ、彼が呪術行為を行っていたに違いないと指摘する。当時のハワイ人信徒の多くは、「食前にエホバに祈り、薬を服用する時にはアウマクアに祈る」のが常であり、「エホバに頼りすぎるのは良くない。外来と土着の神のどちらか一方に偏らない方が良い」と考えていたのである。

カオナやケキピのキリスト教教義に基づく活動にせよ、一般信徒の外来の神と土着の神を使い分ける重層的な信仰にせよ、19世紀のキリスト教のハワイ化は、当事者にそれとは認識されずに進行していった。宣教師的の二元論を受け入れたハワイ人にとって、

キリスト教とハワイの伝統宗教は互いに相容れないものであり、たとえ両者の間にシンクレティックなキリスト教が生まれても、そのことが彼らの意識に上ることはなかったのである。

一方、現在のハワイ人キリスト教徒は、キリスト教が世界各地で独自の発展を遂げていることを知っている。多民族社会のハワイにおいて、彼らが自分たちのアイデンティティを保証するキリスト教の信仰を確立しようとする時、ハワイ文化の様々なアイコンを流用してハワイらしさを前面に出すことになる。この文化流用の対象は、個々の文化アイコンにとどまらず、ハワイの伝統的な価値観や世界観にまで及び、こうして構築された「ハワイ人のキリスト教」は白人のキリスト教に対するアンチテーゼとして提示されるまでになる。彼らにとって、現地化されたキリスト教を不純で不完全なキリスト教と見なす宣教師の言説は乗り越えるべきものでしかなく、自身のキリスト教信仰がシンクレティックであるかどうかを問うことはもはや意味がない。

混淆する宗教・信仰する個人

文化の異種混淆性を指し示す言葉として、ハイブリディティやクレオールという用語がある。この二つの概念はそれぞれ生物学と言語学にその起源を持つが、共にポストコロニアルな状況における人種や文化の問題を射程に捉える。シンクレティズムの概念が、文化の純粋性、正統性、権威性を指定し、本質主義的な立場を強化する傾向があったのに対し、ネイティブの側から提示されたハイブリディティやクレオールの理論は、反本質主義的な視点を提供し、文化とは異種混淆的に生成し続けるものであることを教えてくれる。

ところで、シンクレティズムにせよ、ハイブリディティやクレオールにせよ、これらの分析概念は「文化の発明」や「伝統の創造」といった言葉が指し示す文化の生成プロセスに注目しているという点で、文化構築主義のパラダイムに属していると言える。異なる文化や宗教が出会って混ざり合い、新たに一つの文化や宗教が生まれるというように、異種混淆する文化や宗教が説明されるのである。だが、そこでは、あたかも二つの川が合流して新たな川を形成するかのように、また、ある意志を持った大きな生命体が自らの判断で行動するかのように、“文化”や“宗教”が隠喩的に語られる。このように文化や宗教が前面に押し出されると、その文化に属する人々やその宗教を信仰する人々の日常の営みが見えなくなる可能性がある (Stewart and Shaw 1994)。

人間は文化から離れて生きることはできない。そうであるとすれば、現地の人々が自分の文化を用いて外来のキリスト教を我がものの信仰とする（現地化する）のは極めて当然のことと言える。重要なのは、シンクレティズムやその類似概念を用いて新たな信仰の生成について分析する際に、現地の人々の日々の宗教的実践、一人ひとりの信仰の営みを描ききることである。そうすることで、シンクレティズム概念を鍛え直し、それが言い当てようとした混淆する宗教文化の様態をより明らかにすることができるのではないだろうか。

[参考文献]

Stewart, Charles, and Rosalind Shaw (1994) *Syncretism/Anti-Syncretism: The Politics of Religious Synthesis*. London: Routledge.